Ⅱ-1. 昭和大学医療救援隊による医療活動の概要

昭和大学病院病院長
有賀　徹

平成23年3月11日昼過ぎに発災した直後に，昭和大病院DMAT隊員4名は，あらかじめ決められたルール（つまり，厚生労働省DMAT事務局との電子媒体による連絡など）に従って，宮城県に出動した．引き続き3月14日に昭和大学医療救援隊が岩手県に向って出発した．後者が昭和大による救援活動の，言わば本隊である．

ここでは，この活動の概要を述べるが，これ以外にも昭和大学では，様々な機関からの要請に応じて，整形外科，精神神経科，薬剤部，救急医学，産婦人科，放射線部，MSWのスタッフが各地に赴いている．昭和大は超急性期から急性期，亜急性期，慢性期と一連の時間の流れに応じて，また地震と津波のみならず，原子力発電所の事故に関連した災害にも支援活動を実施してきた．

昭和大学医療救援隊は，平成23年3月15日から4月16日まで約1か月の間，岩手県下閉伊郡山田町で医療活動を行った．参加人員は，医師35名，歯科医師6名，薬剤師10名，看護師35名，理学療法士1名，学生7名，事務職員7名，調理師5名の総勢106名であり，各陣が約1週間ごとに交代し，合計7陣が参加した．また，建設会社々員の同行を得ることもできた．これは，テントを張るなど野営の準備を整えて出発したものであり，当初から調理師による「食」と野営の「住」とについて自己完結を図っていたものである．これは，阪神淡路大震災での経験を踏まえたところであり，他大学などによる様々な医療支援の中でも傑出した特長であった．

結局のところ，救援隊は県立山田病院の屋舎を使用したのでテントを張るには至らなかったが，建設会社々員には盛岡支社を中心に，人員や物資の搬送面で尽力を頂いた．急性期においては，特にガソリンの不足などがあったので，まさに強力な援軍となった．このように，現地において調理師，事務職員，建設会社々員は，医療活動に携わる医療者らを支える役割を担ったことになる．そして，それら現地で働くスタッフの全体を大学本部にいる理事長以下の執行部と学生ボランティアらが支えたという構図である．このように体系的，かつ組織的に活動を展開した全体像もまた，我々昭和大による医療救援活動の大きな特徴であったということができる．

一般的には，発災直後から数日は災害による外傷が医療の主たる対象で，その後に消化器系，呼吸器系，循環器系などの内因疾患が右肩上がりに増えていく．しかし，今回は広域にわたって，死者，行方不明者の数に比して，外傷患者が少なかったことが特徴であった．昭和大学医療救援隊の診療実績からみても，震災に関連した外傷は4%のみで，震災後に発生した内因性疾患が34%であった．そして，震災以前より既往のあった慢性疾患は62%であり，疾患別では，高血圧30%，急性上気道炎18%，アレルギー性疾患10%であった．アレルギー疾患については，花粉症の時期に被災地に砂埃が舞っていたこと，避難所内の埃が原因であったと考えられる．

被災地での医療救援活動は，最終的に地元の医療機関に引き継がねばならない．現地における医療の構築状況や他の医療支援チームの動向をみながら，昭和大学医療救援隊は地元の開業医グループが保険診療を開始する4月15日をもって山田町から撤収することを決断した．撤退の日時について，早期に現地の行政当局や他の医療チームにも通知し了解を得た．このようにして，極めて円滑，かつ順調に撤退できたと思われる．

Ⅱ-2. 昭和大学医療救援隊の支援に至る経緯

昭和大学医学部長
小出　良平

それは平成23年3月11日（金）14時47分に起きた．東京でも震度5強の大きな横揺れが1分以上続き，その後も大きな余震が続いた．TVでは東北沖にM8.8の大地震発生，地域によっては10mもの津波警報が発令されたと報じていた．

16時15分，秘書課より17時から緊急会議が招集されたと連絡を受けた．召集理由は，豊洲病院の建物が崩壊の危険があるので入院患者の避難勧告をうけたためだった（翌日，警視庁の誤りで建物に倒壊の恐れはないことが判明した）．

緊急会議では各病院からの被害報告があり，昭和

大学としては死者も怪我人もなし，ライフラインも支障ないことが確認された．またDMATの派遣要請があり，出動したという報告があった．今回は「本部を組織して大学が一体となって救護活動を行う．本部長は片桐敬学長，副本部長は有賀徹教授（救急医学科），主管は総務課が行う．ボランティアの学内募集をホームページに掲載する．」等が決定した．

3月14日（月）の16時に医療救援隊派遣の第1回目の打ち合わせがあり，第1陣のメンバー，バス（26人，10人乗り）2台，薬品や食料等の準備が完了し，翌15日の12時に結団式，13時に出発することが決まった．目的地は岩手県宮古市との意見があり，現地と連絡をとるように私が指示を受けた．会議終了後，直ちに本学の眼科学教室兼任講師で盛岡市で開業されている谷藤寛泰先生と連絡をとり，県立宮古病院を目的地としたい旨を申し出た．その後，岩手県医師会より折り返し電話があり，明日はひとまず岩手県医師会館を目指して来る様に指示された．

翌3月15日（火）12時，1号館6階の会議室で，第1陣の団結式が行われた．医師5名，看護師6名，薬剤師1名，調理師1名，事務職1名，戸田建設より運転手2名，事務職1名の総勢17名で，第1陣の隊長である板橋教授（小児科学）の下，これからの救護活動の拠点をつくることを使命として大学を13時に出発した．また，大学本部との衛星電話での定時連絡を9時，12時，18時，21時の4回とした．

東北自動車道を北上し，降雪の中22時16分に県医師会館に無事到着し，翌16日（水）8時半よりの岩手医大ミーティングに参加した．そして，県立宮古病院へ移動したが，既に他の施設が入っていたため，陸中山田に南下するという報告が本部にあった．

陸中山田では県立山田病院に八戸日赤病院が既に入っていた．そのため，比較的大きな避難所となっている山田北小学校を目指すという報告が18時に本部にあった．しかし，19時に本部に緊急連絡があり，山田北小学校では「ここは学校であるので病院ではない．今日は寒いから1泊はさせるが，明日は出て行くように」と地元の教育委員長から指示されたという．直ちに盛岡の谷藤先生に電話で相談し，明日17日に地元と連絡して頂くことにして，今日は山田北小学校で泊まることとなった．

17日以降協議が続けられ，結果として3月30日に山田南小学校の2階に引越しするまでの間，この山田北小学校が現地の拠点となった．

その一方で，3月18日には，M4 長嶋君，奥茂君，山本さん，長谷川さん達が中心となって自然発生的に後方支援部隊が立ち上がった．後方支援の第1回目のミーティングは3月22日（火）4号館202号室で行われた．その後，現地への資材調達，現地との定時連絡とレポート作成，義援金の募集活動等を行い，総勢100余名の学生が参加した．これは，前回の阪神大震災での救援活動にはなかった画期的なもので大変勇気づけられた活動だった．

計画当初の「本部を組織して大学が一体となって救援活動を行う」というミッションは，教職員のみならず学生も一緒になって遂行され，第7陣（総勢106名）まで編成されて4月16日に無事終了した．

Ⅱ-3. 昭和大学医療救援隊　活動概要

薬学部薬学教育推進センター
木内　祐二

期　間：平成23年3月15日～4月16日
場　所：岩手県下閉伊郡山田町
　　岩手県立山田病院での外来診療支援
　　山田町内での避難所巡回診療
陣　容：第1陣～第7陣まで
　　概ね5日～8日間程度の活動
患者数：外来・巡回併せて約3,000人弱

平成23年3月11日に発生した宮城県沖を震源とする国内観測史上最大規模（マグニチュード9.0）の東北地方太平洋沖地震と，その後の巨大津波により，東北地方太平洋沿岸に未曽有の被害をもたらした東日本大震災に際して，昭和大学では，岩手県山田町に3月15日～4月15日の期間，7陣にわたり12～18人からなる医療救援チームを継続して派遣し（計106名），医療救援活動を行った．以下にその活動の概要を示す．

1. 山田町での活動開始までの経緯

3月11日午後の地震発生以後，学内の被害調査とその対応を行うとともに，医系総合大学の使命と